

ともにかかわり合いながら、自分づくりをすすめる社会科学習

—第4学年「横浜の入り海を新田に！～吉田勘兵衛の挑戦と現在のわたしたちの暮らし～」の実践を通して—

神奈川県横浜市立立野小学校 野間 義晴

1 はじめに

子どもたちを取り巻く社会環境は大きく変化し、社会的モラルの低下、公共心の欠如、生命倫理の軽視など、大きな問題となってきた。こうした状況を考えると、社会との関係の希薄さから具体的に社会の変化に対応できる能力や態度がさらに求められている。このことは、人としての生き方の問題でもあり、指導要領でも言われる「生きる力」として、本校でいう「自分づくり」にも大きくにかかわってくる。

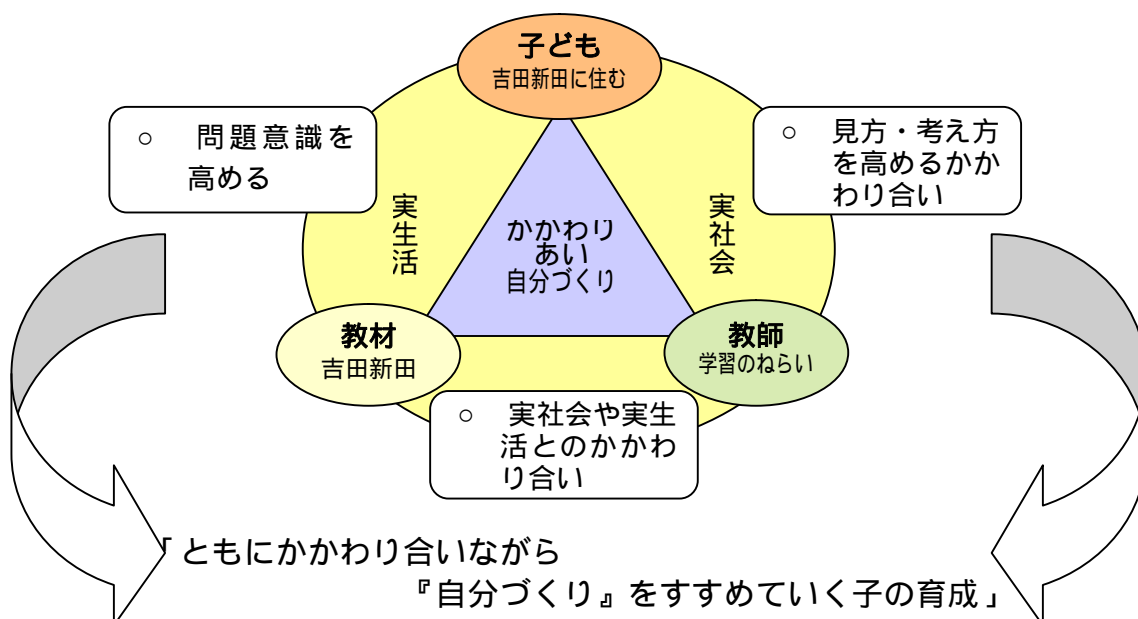
また、授業レベルで考えると、学習問題がなかなかまれないで、子どもが本気にならない、といった悩みはつきない。その原因には、子どもたちの追究が切実になりにくいことが考えられる。どうすれば、子どもたちの心に火が灯り追究が本物になっていくのか。

そこで、本実践においては、「かかわり合い」を視点とした。自分とのかかわりを見つけることでその教材やそれへの見方・考え方が身近に

感じられる。学習した知識や力を活用し、自ら社会的事象にどうにかかわっていったらよいかを考えるなど、先人の開発を自分のこととして身近に引き寄せ、学習を充実させようと考えたのである。具体的な体験活動を取り入れるとともに、「吉田新田」について、横浜市歴史博物館の学芸員の方に教えていただき授業を協働して行った。そして、先人の苦難へ挑戦する生き方にふれ、身近な過去の出来事が遠い存在ではなく、身近に引き寄せることができるようにした。

2 研究の視点

「ともにかかわり合う」授業をつくるためには、子どもの問題追究の切実性を高めるようにすることが重要になる。本実践では、子どもの追究意欲が持続していくような、さらには深まっていくような学習展開はどうあったらよいか、さらにそのような追究が生まれる学習過程はどのようにしてつくられていくのかを考えた。



(1) 問題意識を高めるために

子どもが、「おや?」「あれ?」と思う事実と出会わせることが問題意識を高めるために重要である。しかし、その事実については十分に吟味する必要があるだろう。

「どう考えてもよくわからない、納得いかない」という思いをもたせることで、「ぜひ調べてみたい」という追究意欲は高まり、事実と積極的にかかわろうとする。また、「わからない、納得できない」という思いが強くなると、「友達の考えを聞いてみたい」というかかわり合う思いが高まっていく。

(2) 見方・考え方を高めるかかわり合いの工夫

問題が設定されると、子どもたちは自分なりの方法で調べ活動を行い、自分なりの見方・考え方をもち、そして、それぞれの考えを交流していくことで、問題解決へと向かっていく。

そこでは、具体的に事実をみつめたり、体験などを通して自分の考えを確かめることが大切になる。さらに、自分の見方・考え方と友達とのそれを比較し、意見をかかわり合わせることで、さらに追究が深まり、社会的事象のもつ意味に迫っていくのである。

(3) 実社会や実生活とのかかわり合いを大切に授業づくり

かかわり合いは、子どもたち同士だけでなく、学習している教材とのかかわり合いも含まれる。また、社会科の教材は、自分たちの生活に無縁ではなく、強いかかわり合いをもっている。実社会や実生活での様々な問題について学習し、子ども自身が実生活とのかかわりを強く意識するようになると、社会的事象に対する認識が深まっていくのである。

3 研究の実際

(1) 問題意識を高めるために

「吉田新田」とは、現在の関内など横浜の中心部にあたる場所であり、学校からも近く、本校の子どもにも馴染みが深い。江戸時代に

開発された「吉田新田」について、現在の航空写真と古地図を比べてみることから学習をスタートさせた。新田開発された入り海の様子から、馴染みのある今ある横浜の辺りが、昔海だったという事実に驚きを隠せず、どうやってこれらの場所を埋め立てていったのか、誰がやったのか、何人ぐらいで埋め立てたのか、どのくらい期間がかかったのかなど、「吉田新田」への問題意識が高まっていった。

(2) 見方・考え方を高めるかかわり合いの工夫

体験的活動の重視

「吉田新田」の実際の広さを実感するために、身近にある横浜スタジアムいくつかを考えると共に、その周囲を実際に歩いて見学することを通して、新田の広さを実感し、当時の人々の努力へ目を向けることができた。また、人力で埋め立てた事実から、当時使った「もっこ」などの道具を実際に使って土とりや土運びを行い、当時の人の大変さや苦労を実感的にとらえることができた。

博物館との協働授業



「吉田新田」は、市内で代表的な教材であるが、資料が少なく追究に限界が見られることもあった。そこで、横浜市歴史博物館の学芸員の方と協働して授業展開にあたり、歴史的事実の細かな点について詳しく教えていただくことにより、子どもたちの追究がより深まるように考えた。当時の新田開発が盛んになった背景にある米の重要性や、吉田家の古文書や当時の絵図から分かった埋め立ての経緯など、専門家の立場から歴史的事実を分かりやすく紐解いて頂き、当時の様子について詳しく把握することができた。

自分の見方・考え方の表出

吉田勘兵衛の新田開発に取り組む挑戦について、1度目の大水による埋め立ての失敗からどう改良を加えていったのか、自分なりの見方・考え方を粘土で手順を追って作っていった。勘兵衛の工夫を追体験することにねらいがあったからである。子どもたちの様々な工夫を吟味しあうことによって、「堤防を高くした方がいい」「入り海の上の方から埋めていくのがいい」「海の方から埋めた方がいい」など、様々な見方・考え方が生まれ、それらがかわり合うことで、勘兵衛の工夫に意欲的に迫ることができた。

(3) 実社会や実生活とのかかわり合いを大切に した授業づくり

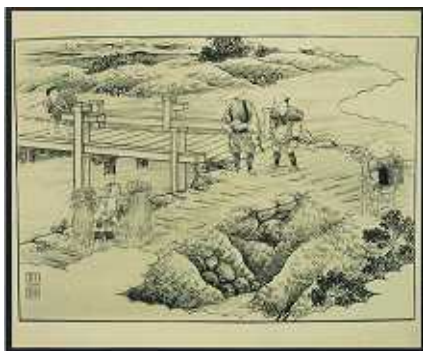
「スタジアムや伊勢佐木町がある場所に、こんな秘密があったなんて知らなかった」など、自らの郷土に対する新たな思いを抱き、実社会や実生活とのかかわりに結びつけることができた。

こうした郷土愛は「自分づくり」につながり、自分を見つめなおすことにも結び付いていった。「吉田新田」という地域素材を教材化することで、自分とのつながりで「おや？」と問題意識が高まり、当初もっていた「吉田新田」に対する自分なりの見方・考え方が多面的なものへと変容していった。この変容により「本当に本当だ!」という満足感を覚えることができ、自分を取り巻く社会を新たな目で見えるようになっていった。

4 研究の成果と今後の課題

このような実践から、子ども相互のかかわり合いを活発化させるには、次の三つが有効と考えた。

教材は子どもたちの興味・関心が期待できるもの



具体的な活動等を取り入れること

事実をじっくり見せる（博物館との協働など）こと

見学や体験活動などで追体験をし、学芸員の方と学習に取り組むことによって、「なんでこんな大変なことをやったのだろう?」と、新田開発にける吉田勘兵衛の思いや願いに迫ることができた。先人の働きについて子どもが自分の思いと比べ、自分に引き寄せることにより、過去の偉業について「すごいな」という賞賛の思いをもつようになっていった。

子ども相互のかかわり合いを、座席表等を通して整理し、矛盾感や見方・考え方の違いが明確になることで、深まりのある認識を得ることができた。かかわり合いが活発になり、「自分づくり」へと結び付いていくのである。

小学校の内容構成をどのように中学校につなげていくかを考える上で、この単元でも、6年生の歴史学習、中学校の歴史的分野の学習へのつながりをきちんと位置付けていく必要があるのではないだろうか。このような視点で、もう一度本実践をふりかえる必要がある。

そして来る、第47回全国小学校社会科研究協議会神奈川大会も見すえ、今後も、問題解決的な学習における問題追究への切実性を考え、研究を進めていきたい。

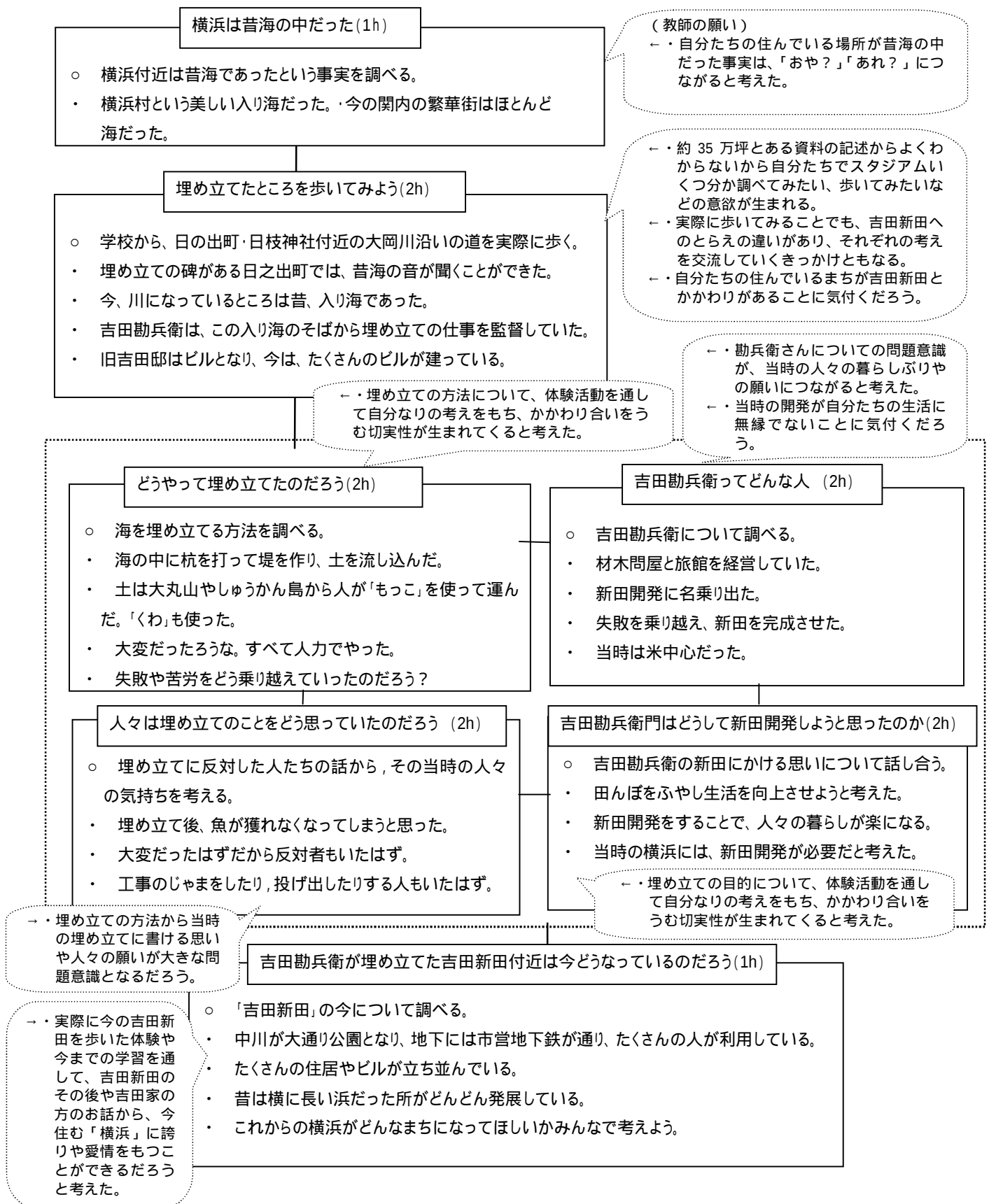
【参考文献】

- 「横浜の礎 吉田新田いまむかし」「吉田新田ができるまで」
横浜市歴史博物館編 2006
- 「小学校学習指導要領 解説 社会」文部科学省 2007



資料

単元の構想(12時間扱い)



横浜市歴史博物館の見学や学芸員の方との見学や出前授業を含め、協働授業も単元の構想として計画。